様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２５１７

研究課題名（和文）「剥奪感の男性化」の実態とその対応をめぐる研究

研究課題名（英文）Research on "masculinization of Deprivation"

研究代表者
伊藤　公雄（Ito, Kimio）

京都産業大学・現代社会学部・教授

研究者番号：００１５９８６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：産業構造の転換や価値観の変容の中で、変化に対応しきれない男性たちが抱えている諸課題を、「剥奪感の男性化　masculinization of deprivazione」という視点から調査し、分析を加えた。調査を通じて、この剥奪感を①経済的剥奪②社会的剥奪③心身上の剥奪（有機体的剥奪）④倫理的・関係的剥奪⑤精神的剥奪に加えて新たに⑥性的剥奪を加えて、調査・分析を進めた。特に、⑥の性的剥奪においては、いわゆるインセル（非自発的禁欲）の男性のかかえる課題に目配りをしつつ、考察を加えた。以上の理論的枠組みに基づき、オンラインによる意識調査を実施し、現在、結果を詳細に分析中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、アメリカ合衆国などでは、「自他に有害な男性性への固着」が問題となっている。また、「絶望死のアメリカ」などの研究によれば、大学卒業資格をもたない白人男性の自殺、薬物中毒の増加に注目が集まっている。本研究は、これまで「男性である」ということで達成され維持されてきた「地位」や「力」が、産業構造の変動や労働の形態の変化、価値観の変容などによって揺らぎを生み出し、少なくない男性の間に「剥奪感」を生じているのではないかという仮説に基づいて、男性の剥奪感の実態を、日本社会を対象に調査研究を行った。研究のを通して、ジェンダー平等へと変化が進む状況での男性を取り巻く課題を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In the midst of the transformation of industrial structure and changing values, we investigated and analyzed various issues faced by men who are unable to cope with the changes from the perspective of "masculinization of deprivazione. Through the survey, we investigated and analyzed (1) economic deprivation, (2) social deprivation, (3) mental and physical deprivation (organic deprivation), (4) ethical and relational deprivation, (5) spiritual deprivation, and newly added (6) sexual deprivation to the list. In particular, with regard to the sexual deprivation (6), we have added a discussion while paying attention to the issues faced by so-called incel (involuntarily abstinent) men. Based on the above theoretical framework, we conducted an online attitude survey and are currently analyzing the results in detail.

研究分野：ジェンダー社会学

キーワード：剥奪感の男性化　ジェンダー政策　男性性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2006 年以後、世界経済フォーラムが毎年発表しているグローバルジェンダーギャップ指数で日本のランキングは、110 位代から 120 位代を行き来している状態であり、国際的に見ても極めて問題を抱えている状況にある。他方、1990 年代以後ほぼ 30 年にわたる日本社会の経済的停滞もまた、大きな社会的課題であることが顕在化してきた。こうしたさまざまな課題の背景には、社会や産業の複雑化・多様化に、日本社会が対応しきれない状況があると考えられる。多様化・分権化の未成熟状態は、日本社会が戦後の高度経済成長以後の男性中心の産業労働モデルを維持し、男性主導の中央集権型で均質な組織運営から抜けきれない点に原因のひとつがあると考えた。21 世紀の日本社会が、安定していると同時に活力ある形で持続していくためには、多様化・分権型への社会の再編成が求められることは言うまでもない。なかでもジェンダー平等を含む社会の多様化（ダイバーシティの推進）は、重要な鍵となると考えられたのである。また、SOGI（性的指向および性自認）といった視座も含めて、ジェンダーおよびセクシュアリティの多様化・複雑化も大きな社会的課題になりつつあった。

日本社会の多様化の促進のためには、戦後日本社会における男性主導の社会の仕組みの根本的な変革が必要である。しかし、ジェンダー平等の視座にたった、男性対象のジェンダー政策は、日本社会では未だ十分に展開されているとはいえない状況であった。

他方で、20 世紀末から日本も含む各国で、男性による「理由なき凶悪犯罪」が目立って増加しつつあった。背景には、ジェンダー平等＝多様化へと移行しつつある現代社会において、変化に対応できず古い「男性性」に固着している男性たちによる暴力を通じた「（男性としての）自己実現」という社会病理現象が控えていることが想定された。

本研究は、以上のような背景を踏まえ、男性の「剥奪感」の現状と、それへの対策をめぐる政策提言を目指して計画されたものである。

２．研究の目的

国連は 2003 年にジェンダー平等へ向けた「男性・男児の役割」に注目を開始し、国際会議の開催など男性対象のジェンダー平等政策を展開してきた。EU もまた 2010 年前後から幅広い調査研究と議論を進め「男性・男児」の課題を正面からみつめるレポートをすでに何度か発出してきた。日本社会も本格的なジェンダー平等社会を目指すのであれば、男性・男児対象のジェンダー政策の一層の深化が求められると考えられる。

他方で、ジェンダー平等や多様化・複雑化に向かう社会変容のなかで、この変化に対応仕切れず、固定的な男性性に固執する男性の存在が顕在化しつつあることにも注目したいと思う。近年、アメリカ合衆国などで社会問題化している Toxic Masculinity（自他に有害な過剰な男性性への固着）は、その典型例であろう。

本研究は、この Toxic Masculinity　概念の登場に見られるような現代社会における「男性性のゆらぎ」や「男性性の危機」を、「剥奪感の男性化」（伊藤、2018 他）という観点から読み解き、その対応策を、ジェンダー平等政策の中に位置づけることを目的としている。

本研究では、主に日本社会を主な対象とし、ネット調査の実施を踏まえた考察を行うことを目的とする。ただし、その研究の成果は、国内にとどまらず国際的にも共有される可能性を持っており、研究結果については積極的な国際的発信も考えている。

３．研究の方法

国際的な男性性の危機と対応をめぐる文献資料および行政資料を収集し分析をくわえた。特に、アメリカ合衆国をはじめ経済の発達した諸国で発現しているToxic Masculinity についての文献や資料収集には可能な限り幅広く資料収集を実施した。また、日本国内における「男の悩みホットライン」等、民間の男性相談のインタビュー調査を行った。その上で、これまで実施した台湾、スウエーデン、イタリアでのインタビュー調査結果なども参照しつつ、現代社会で男性がかかえている「悩み」や直面している諸課題について整理を行った。

以上のような予備的研究の上で、研究の主要な目的である「剥奪感の男性化」について、宗教社会学者であるグロックらの「宗教に入信する契機になった剥奪感」についての分類をもとに、①経済的剥奪②社会的剥奪③有機体剥奪④倫理的剥奪⑤精神的剥奪という５つの基本的視座を参照にしつつ、これに⑥性的剥奪を追加し、地域的な特性や世代間の差異などにも注目しつつアンケートを作成し、インターネットによる調査を実施した。

調査研究を基礎に、「剥奪感の男性化」現象を、理論的に整理する作業を行った。この作業にあたっては、「剥奪感の男性化」とToxic Masculinity現象とのかかわりや、現代社会における男性性の危機（メンズ・クライシス）という観点を重視することとした。

研究成果

４．研究成果

ジェンダーをめぐる大きな変化に対応しきれないでいる男性たちの抱える課題を「剥奪感の男性化」という視点で捉え、①経済的剥奪、②社会的剥奪、③有機体的剥奪、④倫理的剥奪、⑤精神的剥奪、に加え、現代社会で新たに注目を集めている「インセル（非自発的禁欲者）」などの現象を視野に⑥性的剥奪を加えることで、より理論的な枠組みを強化することができた。また、これらの視点を踏まえ、ネット調査を実施することを通じて、現代日本の男性たちが抱いている剥奪感の実態を明らかにしつつある。

この「剥奪（感）の男性化」という視点は、日本のみならず国際的にも有効な分析枠組みになるものと考えている。アメリカ合衆国などで 2010 年代に入って以後、メディアでしばしば使用されている「トクシック・マスキュリニティ（自他に有害な男性性への過剰な固着）」現象や、アン・ケースとアンガス・ディートンらの「絶望死のアメリカ（低学歴の白人男性の薬物中毒や自殺による死亡者の増加）」などの社会現象を考察する上でも、重要な意義を持っていると考えられる。また、韓国社会で近年注目されている若い男性による「フェミニズム嫌悪」現象や、世界中で発生している「フェミサイド（女性であるが故に攻撃や殺人の対象になる）」の考察にとっても有効性がある。

本研究が提案した「剥奪感の男性化」は、すでにアメリカの研究者の間で使用され始めている（アリソン・アレクシー『離婚の文化人類学』2020＝2022 など）。また、この概念をタイトルにした伊藤の論文が 2023 年 11 月に英訳され、すでに多くの研究者の注目を集めつつある。

今後、男性性研究や男性を対象にしたジェンダー平等政策立案に際して、本研級が生み出した成果は、国内外で活用される可能性が高いものと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊藤公雄	４．巻 13
２．論文標題 複雑化・多様化する世界におけるジェンダー平等戦略―若者と男性にお動向を軸に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 NWEC実践報告	６．最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤公雄	４．巻 449
２．論文標題 『家族主義』幻想とジェンダー政策	５．発行年 2023年
３．雑誌名 季刊　社会運動	６．最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 多賀太	４．巻 65(3)
２．論文標題 ジェンダー平等社会と家庭科教育の可能性―男性のケア参画の視点から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本家庭科教育学会誌	６．最初と最後の頁 121-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤野敦子	４．巻 76(4)
２．論文標題 転勤を伴う働き方が出生意欲に及ぼす影響ー若年正規雇用のジェンダー比較分析から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 経済学研究	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大東貢生	４．巻 73
２．論文標題 地方自治体における男女共同参画事業の推進について（１）－大阪府寝屋川市の審議会での議論から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 佛教大学社会学論集	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤公雄	４．巻 24
２．論文標題 「現代社会と男性性―「メンズクライシス（男性危機）」の時代を前に」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本ジェンダー研究	６．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤公雄	４．巻 26-12
２．論文標題 新型コロナ禍が映し出した社会―ケアとリペアのデモクラシーに向かって」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 多賀太	４．巻 ７１－４
２．論文標題 近代日本における女性エリートの輩出過程に関する考察－「私の履歴書」執筆者の事例から－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西大学文学論集	６．最初と最後の頁 171-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤野敦子	4．巻 24
2．論文標題 夫の『単身赴任』の経験が夫婦関係に与える影響―一般化傾向スコアを用いた分析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本ジェンダー研究	6．最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大東貢生	4．巻 73
2．論文標題 地方自治体における男女共同参画計画策定をめぐって	5．発行年 2021年
3．雑誌名 佛教大学社会学部論集	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 多賀太
2．発表標題 ジェンダー平等社会と家庭科教育の可能性―男性のケア参画の視点から
3．学会等名 日本家庭科教育学会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 多賀太
2．発表標題 SDGsとジェンダー平等教育―諸課題の同根性と交差性の視点から―
3．学会等名 日本教育学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 藤野敦子
２．発表標題 イフコース上で生じる夫の転勤が妻の出生意欲に与える影響：反事実モデルによる直接・間接効果の測定から
３．学会等名 関西社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤野敦子
２．発表標題 ライフコース上で生じる夫の転勤が妻の出生意欲に与える影響：反事実モデルによる直接・間接効果の測定から
３．学会等名 日本人口学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤野敦子
２．発表標題 理工系（STEM）分野に生じるジェンダーギャップ：その背景と課題
３．学会等名 日本機械学会関西支部（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 多賀太
２．発表標題 コロナ禍での家庭教育とジェンダーをめぐるポリティクス
３．学会等名 日本子ども社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 多賀太
２．発表標題 近代日本における女性文化人の輩出過程に関する考察－「私の履歴書」執筆者の事例から－
３．学会等名 日本教育社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 石井クンツ昌子・多賀太・伊藤公雄・植田晃博
２．発表標題 日本と欧米データの比較から見る男性の育児・家事頻度とジェンダー意識
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大山治彦・大東貢生・多賀太・伊藤公雄
２．発表標題 スウェーデンにおける「SOGI平等」へのとりくみ－スウェーデン教会とのかかわりにおいて－
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kimio ITO
２．発表標題 L’esperienza del Giappone:Politiche di genere e violenza domestica. Una prospettiva maschile
３．学会等名 Fondazione ForenseFerrarese,（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Futoshi Taga
２．発表標題 Is a caring man masculine?: care-related behaviors and diversifying gender attitudes of Japanese men
３．学会等名 Harvard Japan Events, Reischauer Institute of Japanese Studies,
４．発表年 2022年

１．発表者名 多賀太
２．発表標題 夫婦外への家事委託が家事負担感に及ぼす効果
３．学会等名 日本家族社会学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 伊藤　公雄、多賀　太、大束　貢生、大山　治彦、中澤　智惠	４．発行年 2022年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 228
３．書名 男性危機（メンズ・クライシス）？	

１．著者名 多賀　太	４．発行年 2022年
２．出版社 時事通信出版局	５．総ページ数 256
３．書名 ジェンダーで読み解く　男性の働き方・暮らし方	

１．著者名 伊藤公雄、藤野敦子、太束貢生	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 320
３．書名 フランスに学ぶジェンダー平等の推進と日本のこれから（富士谷あつ子・新川達郎編著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大束　貢生 (Otsuka Takao) (20351306)	佛教大学・Faculty of Sociology・associate professor (34314)	
研究分担者	藤野　敦子 (Fujino Atsuko) (50387990)	京都産業大学・Faculty of Sociology・Professor (34304)	
研究分担者	多賀　太 (Taga Futoshi) (70284461)	関西大学・Faculty of Literature・Professor (34416)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関